

防災の知恵



戦争に隠された
地震度7 木村玲欧

葬り去られた
大震災!

1944年12月7日、南海トラフを震源に死者・行方不明者1223人の被害が出た東南海地震は、戦争の遂行に悪影響があるとして情報が隠され、戦後もあまり知られていなかった。同様の海溝型地震である東日本大震災を受けて広く知られるようになり、各地で地震や

第2次大戦末期の1945年1月13日に起きた三河地震は、震度7相当の揺れが襲った直下型(内陸型)地震で、2306人が犠牲になったが、前月の東南海地震とともに、当時は「被害はほとんどない」と報じられた。名古屋大助教も務め、8月に三河地震がテーマの「戦争に隠された『震度7』」(吉川弘文館)を刊行した木村玲欧・兵庫県立大准教授(39)(防災情報学)は、過去の災害を知り、伝えること、災害を自分のことと考えることの大切さを訴える。今回は、木村さんが言う「わがこと意識」と防災とのかかわりを考えてみたい。

(岡本公樹、黒木健太郎)

過去の大地震 Ⅱ 「わがこと」

正しい教訓学べ

大学院で阪神・淡路大震災の研究をし、2003年に名古屋大に着任した木村さんは、講演で参加者から「愛知県はほとんど災害が起きた」と言われてショックを受けた。同時に、情報をきちんと伝えることの大切さを改めて感じたという。

1944年12月7日、南海トラフを震源に死者・行方不明者1223人の被害が出た東南海地震は、戦争の遂行に悪影響があるとして情報が隠され、戦後もあまり知られていなかった。同様の海溝型地震である東日本大震災を受けて広く知られるようになり、各地で地震や

津波への備えが進んでいるが、37日後に起きた三河地震は、東南海の倍の被害者を出しながら

地元の活断層 親子で見学

大戦中の三河地震、恐ろしさ実感



深溝断層を見学する子どもたち

9月27日、三河地震でできた愛知県幸田町の深溝断層を、地元元の大溝小学校の全校児童と保護者ら約600名が訪れた。学校をのそばに活断層があるのに、

ピンと来ない児童が多い(山本勝秀校長)ことから行われた親子での見学。地面が最大約1・5メートルの星野早紀さん(11)は、初

ら、広く知られているとは言えない。

「歴史的にみて、海溝型地震が直下型地震を誘発することがある。三河地震はその典型的なケース」と木村さんは説明する。

直下型は震源が近く、狭い範囲だが、建物の倒壊などの被害は海溝型よりも大きくなりやすい。三河地震の被災者から木村さんが聞き取った調査では、1

か月前の東南海地震の揺れがびっくりだったという経験が誤った教訓となり、かえって被害が大きくなったことが明らかになったという。

木村さんは「東海地域では津波の対策をすれば万全の思い込みが、さらに被害を拡大させる危険性がある」と、海岸や川から遠い地域に住む人も「わがこと意識」を高めることが重要だと指摘する。

めて見た。すく地面が下がっていつかあったと驚いていた。「わがこと意識」を高めるには「地域性、現実性、人間性の3要素がある」と木村さんは言う。「自分の住む土地で起きるといふ地域性、歴史を知る現実性、地震で自分の生活が一変することを想像する人間性など、断層見学などの体験は効果が高い」と、こうした催しを評価する。

まずは地元で起きた過去の災害を知ることが、意識を高める第一歩。木村さんは「かつて大災害は一生にせいぜい1、2回と頻度も低く、意識を高めるのは難しかった。だが、最近では地震だけでなく、豪雨や土砂災害などが頻繁に起きるようになってきた」とし、うえで、「二人ひとり災害を『わがこと』と考え、身近な防災行動につなげていくことが大切」と呼びかけている。